

① 須磨浦公園 敦盛塚

須磨区一の谷町5丁目

<神戸市ホームページより>

国道2号沿いの須磨浦公園の西にあり、「一の谷の戦い」で源氏の武将・熊谷直実(くまがいなおさね)に討たれた若武者・平敦盛(あつもり)の供養塔であると言われています。

高さ約3.5メートルの五輪の石塔で、室町時代のものではないかと考えられています。国道を挟んですぐ南には須磨の海が広がっています。



須磨は源平合戦をはじめとする歴史と史跡の宝庫です。須磨寺(福祥寺(ふくしょうじ))には、平敦盛が生前携えていたといわれる「青葉の笛」(宝物館)や正岡子規(まさおかしき)・松尾芭蕉(まつおばしょう)・尾崎放哉(おさきほうさい)をはじめとする文学碑などが多数あります。

また、山陽電鉄須磨寺駅のすぐ北には「平重衡(しげひら)とらわれの遺跡」の碑がある他、貴公子・在原行平(ありわらのゆきひら)と村の美しい姉妹の悲しい恋の伝説(謡曲「松風(まつかぜ)」として有名)を伝える「松風村雨堂(まつかぜむらさめどう)」、菅原道真(すがわらのみちざね)が九州に左遷される途中に立ち寄った地に建てられたといわれる「綱敷天満宮(つなしきてんまんぐう)」などがあります。

(市指定有形文化財)

【平敦盛】たいらのあつもり

平安時代の武将(1169~1184)。平経盛(つねもり)の子。一の谷の戦いで、源氏の熊谷直実(くまがいなおさね)に討たれた。横笛の名手といわれる。若くして悲劇的な死をとげたため、謡曲や歌舞伎などの題材となり著名である。敦盛にまつわる伝承は多く、「首塚」とされるものは須磨寺境内のものが代表的。

「敦盛そば」 そば屋さん 店内に資料展示



② 須磨寺

神戸市須磨区須磨寺町

須磨寺は真言宗須磨寺派の本山で、仁和(にんな)二年(886)に間鏡上人(しょうにん)が勅命を受けて開いたといわれます。一ノ谷合戦に近いこともあり、源平ゆかりの寺宝が多くあり、



特に平敦盛の首が当寺に埋葬したとの謂われもあり、敦盛関連の寺宝が多く見られます。・敦盛関係(青葉(あおば)の笛(ふえ)・鎧甲・弓・矢筒・白筆和歌・敦盛木像・画像・首洗池・首塚など)・その他(弁慶若木桜・弁慶釣鐘・義経腰掛松など)

<須磨寺ホームページより>

平敦盛公は平清盛公の弟平経盛公の子で、従五位に叙せられたが、官職が無かったので世に無官の大夫と言われた。一ノ谷合戦で、源氏方の熊谷次郎直実公に討たれる。(1169~1184)

平家物語によれば寿永3年2月鴨越えの坂落としにより、平家方が惨敗を喫し、海岸へと味方の船を求め殺到した。直実も平家方を追って、沖の方へ馬を泳がせている若い武将を見つけた。「後ろを見せるとは卑怯なり、返せ、返せ」と呼んだところ、若武者は馬を戻した。二人は一騎討ちとなり、共に馬から落ちて組み合いとなった。直実が勝って、首を取ろうと相手の顔を見た。あまりに美しいので、名前を尋ねると、自らは名乗らず、直実に名乗らせた。その名前を聞いて「良き名前なり、我が名は誰かに聞けば知っている者もあろう」と言って、首を差し出した。直実はためらったが、他の味方の兵士が近づくのを見て、涙をのんで、その若武者の首をはねた。その時に、若武者の腰の笛に気づいた。その戦の朝、陣中で聞いた美しい笛の音色は、この若武者のものであったのかと思いいった。このことから、直実は、殺し合わねばならない戦の世に無常を感じ、出家を決意することになる(後に熊谷蓮生坊)。この笛が小枝の笛と呼ばれる通称青葉の笛である。

一ノ谷の合戦(地図)の旧跡が残り、当寺は源平の名所として知られている。往古より青葉の笛は国の重宝であり、松尾芭蕉を始めたくさんの人々が訪れている。また、謡曲「敦盛」、舞「幸若」にも登場し、歌舞伎、映画、舞台などに大人気で演じられている。

毎年、旧暦の2月7日(旧暦なので、その年によって変る)には一ノ谷合戦源平戦士の追悼法要が行われる。

③ 平忠度 胴塚

神戸市長田区野田町 8 丁目 27 番

<神戸市ホームページより>

平清盛の末弟の薩摩守忠度は、豪勇で知られ、歌道でも有名で歌集もある文武に秀でた武将です。

一の谷合戦の際、西門一の谷を守り、土肥実平(どひさねひら)軍をよく防ぎましたが、敗れて逃げる途中、岡部六弥太忠澄(ただずみ)と戦い、首を討ち取ろうとしたところを、忠澄の家臣に後ろから右腕を切り落とされ、ついに静かに念仏して忠澄に討たれました。

以前はこの地に塚があったようですが、大正 6 年に野田協議会により石碑が建てられ敷地が整備されました。

ここから東に約 300m 離れた駒ヶ林 4 丁目には、平成 10 年度に地域文化財に認定された、平忠度塚(腕塚)があります。

地元の野田町 8 丁目自治会では、定期的な清掃活動や、毎年 8 月の地蔵盆には隣接する地蔵とあわせて供養しており、地域で親しまれ大切に守られています。



④ 平忠度 腕塚

長田区駒ヶ林 4 丁目 5 番

<神戸市ホームページより>

平清盛の末弟の薩摩守忠度は、豪勇で知られ、歌道でも有名で歌集もある文武に秀でた武将です。この十三重塔はこの忠度を祀る石塔と伝えられています。

一の谷合戦の際、西門一の谷を守り、土肥実平(どひさねひら)軍をよく防ぎましたが、敗れて逃げる途中、岡部六弥太忠澄(ただずみ)と戦い、首を討ち取ろうとしたところを、忠澄の家臣に後ろから右腕を切り落とされ、ついに静かに念仏して忠澄に討たれました。



ここから東に約 300 メートル離れた野田町 8 丁目には、平成 14 年度に地域文化財に認定された、平忠度胴塚があります。

⑤ 築島寺

神戸市兵庫区島上町 2-1-3

<神戸市兵庫区ホームページより>

島上町は、承安年間(1171~75)に平清盛が海を埋め立てて築かせた「経ヶ島」の寄洲の上にできた町で、清盛は大輪田ノ泊修築工事にあたり、六町四方ほどの島を築き東南風を防ごうとした。



しかし大風が吹くと島は崩れ、難工事だったので 17 歳の松王丸が人柱となったという伝説が生まれ、経文を記した石を多く沈めて基礎として築いたので、経ヶ島とも呼ばれるのだとされる。経ヶ島の名は失われたが、町内の築島寺(来迎寺)には「松王小児入海」の碑と墓が残っている。

～兵庫歴史博物館ネットミュージアムより抜粋～

「松王丸 清盛の夢と神戸の海に沈んだ少年」

平氏(へいし)が、たいへん栄えていたころの話です。平清盛(たいらのきよもり)は、兵庫に都を移して、中国の宋(そう)と貿易をしようと考えていました。そのためには、大きな港が必要でした。

そのころの兵庫の港——大輪田の泊(おおわだのとまり)と呼ばれていました——は、北風は六甲(ろっこう)の山並みにさえぎられ、南西の風は和田岬(わだみさき)にさえぎられていましたが、南東からの風は防ぐものがなく、この向きから大風がふくと、船が出入りすることもできませんでした。清盛は、ここをもっと安全な港にしようと考えたのです。

南東からの風や波を防ぐためには、港のおきに島を築いて防波堤にするしかありません。そのため、会下山(えげやま)の南にあった塩槌山(しおづちやま)を切りくずして、その土砂を海へ運ぶことになりました。

しかし、機械の力もない時代です。仕事はなかなかかどりません。深い海に土砂をうめて、あと少しというところまでくるのですが、そのたびに潮に流されてしまいます。どうすれば工事がうまくゆくのか。清盛は陰陽博士(おんみょうはかせ)に占わせてみました。

「島を築くには、海中の竜神の怒りをしずめなくてはならない。そのためには、三十人の人柱を、海にしずめて竜神に供えるとよいだろう。」

これが占いの答えでした。

清盛はさっそく、生田(いくた)に関所を設けて、人柱にするために旅人をつかまえ始めました。つかまえられた人たちや家族の泣き声が、和田の松原にひびきわたったといひます。

清盛には、そば仕えの少年が何人かいました。その中のひとり、讃岐国(さぬきのくに)の武将の子、松王丸(まつおうまる)という十七歳の少年は、つかまえられた人たちの悲しみを見かねて、清盛に言ひました。

「人柱などというむごいことは、おやめください。私が三十人の身代わりになりましよう。」

はじめ、清盛は聞き入れませんでした。けれども松王丸はあきらめず、何度も何度もくり返し、清盛にうったえまひました。

ついに、清盛も松王丸の申し出を聞き入れまひました。松王丸は、石の櫃(ひつ)に入れられ、白馬の背に乗せられて港へと運ばれまひました。そして、千人の僧侶の、読経(どきょう)する声がひびく中で、海の中へとしずんでいったのです。

人々は涙を流しながら、お経を書き写した大小さまさまの石を海へ投げ入れまひました。

こうして、波を防ぐための島は完成し、「築島(つきしま)」と呼ばれまひました。たくさんのお経をしずめたので、「経ヶ島(きょうがしま)」とも呼ばれまひます。

その後清盛が築島の完成を祝ったとき、西にそびえる高取山の山頂からわき上がった紫色の雲が、築島の上をおおい、美しい楽の音とともにたくさんのおんが現れまひました。その中に松王丸の姿もありまひました。やがて松王丸の姿は、如意輪観音(にょいりんかんのん)へと変わり、金色の光を放ったといひます。

清盛は、松王丸をとむらうために、この地に寺を建てまひました。それが、経島山来迎寺(きょうとうざんらいこうじ)のはじまりだそうです。その境内には、今でも松王丸の供養塔(くようとう)が残ってまひます。

紀行文 平氏伝説の旅 ～大輪田泊と、福原京から煙島まで～

<「平家物語」関連人物事典より>

妓王・妓女（ぎおう・ぎによ）

生没年不詳。

平安後期の白拍子の姉妹。近江野洲（やす）郡江辺（えべ）荘生れ。姉の妓王は歌舞の名手で平清盛に寵愛され、妹の妓女、母刀自（とじ）と共に西八条邸に囲われ、世の羨望の的となる。

しかし、やがて清盛の寵愛が同じ白拍子の仏御前に移ると世をはかなみ、嵯峨の往生院の辺りに隠棲した。

嵯峨野にある祇王寺はその伝承に因（ちな）み、明治期に復興された寺である。

<祇王寺のホームページより>

平家物語の巻頭に、祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し。……………と美しく書き出してあるが、更に読み進むと祇王祇女の事が出て来る。これは平氏全盛の頃、平清盛と二人の女性の哀れな物語である。

この頃、都に聞えた白拍子の上手に祇王、祇女と言う姉妹があった。近江の国野洲江辺庄の生れ。父九郎時定は、江辺庄の庄司であったが罪あって、北陸に流されたので、母と共に京都に出て、白拍子となり、のち姉の祇王が清盛の寵を得て、妹祇女も有名となり、毎月百石百貫の手当もあり、安隠に暮らしていた。或時清盛が祇王に、何か欲しいものがあるかと尋ねると、祇王は、自分の生国は水の便が悪く、毎年旱害を受け、一庄三村は飢餓に苦しんでいるから、願わくば、水利を得させて戴きたいと願った。清盛は早速、野洲川から三里の溝を掘らせ、水を通した。里人はこれを徳とし溝を名づけて、祇王井川と呼び、今に至っている。

所がここに加賀の国の者で、仏御前と呼ばれる白拍子の上手が現われて清盛の西八条の館に行き、舞をお目にかけたいと申し出た。清盛は、神とも言え、仏とも言え、祇王があらんずる所へは叶うまじきぞ、とうとうまかり出でよと門前払いをしたが、祇王が、やさしく取りなしたので、呼び入れて、今様を歌わせることにした。仏御前は、

君を初めて見る折は 千代も歴ぬべし姫小松
御前の池なる亀岡に 鶴こそ群れいて遊ぶめれ
と繰り返し三べん歌ったが、声も節も頗る上手だったから、清盛は、たちまち心動かして仏御前に心移した。昨日までの寵愛は何処へやら、祇王は館を追い出されることになった。せめてもの忘形見にと、
萌えいづるも 枯るるも同じ 野辺の草
いずれか秋にあわではつべき
と障子に書き残して去って行く。

あくる春になって清盛は仏が退屈しているから、舞を舞って仏をなぐさめよと使者をよこすと、祇王はもとより行く気は無かったが、清盛の権勢と母の哀願に抗しかね、館に行つて、 仏もむかしは凡夫なり われらも遂には仏なり

いずれも仏性具せる身を 隔つるのみこそ悲しけれ
と歌い舞った。並居る諸臣も、涙を絞ったと言う。

祇王「かくて都にあるならば、又うき目を見むづらん、今は都を外に出でん」とて、祇王二十一、祇女十九、母刀自四十五の三人、髪を剃つて尼となり、嵯峨の山里、今の祇王寺の地に世を捨て、仏門に入る。母子三人念仏している所へ竹の編戸を、ほとほとたたく者がある。出て見ると、思いもかけぬ仏御前であった。

祇王の不幸を思うにつれ、いずれか秋にあわで果つべき、と書き残された歌を誦するにつれて、無常を感じ、今朝、館をまぎれ出でて、かくなりてこそ参りたれと被っていた衣を打ちのけるのを見れば、剃髪した尼の姿であった。わずかに十七にこそなる人の、浄土を願わんと深く思い入り給うこそ、と四人一緒に籠つて朝夕の仏前に香華を供えて、みな往生の本懐を遂げた。

⑥ 清盛塚・琵琶塚・平清盛像

兵庫区切戸町

<神戸ホームページより>

高さ約 8.5 メートルの十三重の石塔で「弘安 9 年(1286 年)2 月」の年号が刻まれています。もともとは現在より南西 11 メートルの場所にありましたが、大正 12 年に旧神戸市電の道路拡張工事に伴い移転されました。



そのときの調査で遺骨は発見されず、墓ではなく供養塔であることが判明しました。

現在、石塔の隣には柳原義達(やなぎはらよしたつ)氏の作になる平清盛像と、琵琶の名手・平経正(つねまさ)にちなんだ「琵琶塚」碑が建てられています。

また、兵庫の町は良好な港のある町として平安時代からよく知られており、鎌倉新仏教のひとつ「時宗(じしゅう)」の開祖・一遍(いっぺん)の墓がある「真光寺(しんこうじ)」、松王丸(まつおうまる)の人柱(ひとばしら)伝説を伝える「来迎寺(らいごうじ)(築島寺・つきじまでら)」、日本ではじめて施餓鬼修法(せがきしゅうほう=仏教で死者が迷い込む世界のひとつ・餓鬼道(がきどう)に落ちた者を供養する)が行われたといわれる「薬仙寺(やくせんじ)」など、史跡が豊富です。

これらの史跡を結ぶ散策ルートは、一般公募により「兵庫津の道(ひょうごつのみち)」と名づけられています。

(県指定重要文化財)

<神戸市兵庫区ホームページより>

切戸町にはむかし、魚の御堂(称名寺)があった。平清盛が魚族のために設けたという伝説が残っている。町の南端に清盛塚がある。養和元年(1181)京都で亡くなった清盛の遺骨を円実法眼が持ち帰って山田の法華堂に納めたと『吾妻鑑』にあり、山田を和輪田の誤りとする人は、この塚が墓所だと考えてきた。しかし、大正 12 年の調査で、この清盛塚は墳墓でないことがわかった。この十三重の石塔は、弘安 9 年(1286)の銘を持ち、神戸市電の道路拡張工事で現在地に移った。昭和 47 年柳原義達作の清盛像も脇に建てられ、その隣に平経正の琵琶塚、そして文化文政期(19 世紀前期)の俳人・子曰庵(ねのひあん)一草の句碑が並んでいる。琵琶塚、句碑もともに近くからここに移築されたものである。

⑦ 能福寺

兵庫県神戸市兵庫区北逆瀬川町 1-39

<神戸市兵庫区ホームページより>

北逆瀬川町にある能福寺は平清盛ゆかりの寺として有名で、初代住職・円実法眼が清盛が京都で死んだ後、遺言により遺骨をこの地に持って来て法華堂(諸説あり、所在地も確定できず)に納めたとされる。



<ホームページ 神戸観光壁紙写真集より>

新西国二十三番霊場・宝積山能福寺(ほうしゃくざん のうふくじ)は天台宗の仏教寺院で、本尊は最澄作の秘仏・薬師如来像です。

805年(延暦24年)、唐に留学していた伝教大師最澄が帰途、兵庫の和田岬に上陸し自作の薬師如来像を安置し、日本で最初の教化霊場・能福護国密寺としたのが開創であると伝えられています。

能福寺は平清盛所縁の寺としても知られ、1180年(治承4年)、福原京遷都にともない平清盛が能福寺で剃髪入道(浄海)し、平家一門の祈願寺に定められ大伽藍が建設され八棟寺と称されました。

能福寺境内には平相国廟(平清盛廟)・平清盛公墓処があり、平清盛が京都で茶毘にふされたとき、この寺の住職円実法眼が清盛の遺骨を持ち帰り寺領内に葬ったと伝えられています。

⑧ 監物太郎の碑

神戸市長田区四番町8

平家物語によると平盛俊は剛勇の武将として知られ、怪力でも有名であった。寿永3年(1184)2月7日、源平一ノ谷の合戦では北城戸(長田区明泉寺付近)に侍大将として布陣するが、平氏方の敗退に伴い敗走する。その途中で源氏方の猪股小平六則綱と対決し押さえ込む。命乞いする則綱の命を助けるが、逆に隙をつかれて則綱に討たれる。

ひざを射られた監物太郎頼賢にちなみ、碑は「腰から下の病を救う霊験がある」と伝えられる＝



2005年9月15日掲載 神戸新聞より～

壮絶に散った「忠臣」 監物太郎の碑

その戦いぶりから、のちに「忠臣」とたたえられる男がいる。平清盛の四男知盛に仕えた監物(けんもつ)太郎頼賢。

長田神社前商店街を西にそれた一角に、供養の碑が立つ。

祠(ほくら)に包まれ、花に装われた碑。今年三月には、「神戸市地域史跡」に認定された。



合戦の東城戸「生田の森」を守っていた平知盛。激戦を経て、気付けば味方はほとんどいなくなっていた。残るは、嫡男知章と家臣の監物太郎頼賢、そして主従三騎のみ。

「ここから浜に向かって駆けようぞ」。知盛らは、川沿いを急いだ。しかし、途中で運悪く、敵の集団に見つかってしまう。

数は十騎あまり、「これは大將軍とおぼえたり」と喚(わめ)きつつ、砂煙をあげて追いかけて来る。

監物は名立たる弓の上手であり、馬上より矢をつがえて、真っ先に進んで来た旗持ちの首の骨をひょう、ふっと射て馬より射落す。

(宮尾登美子「宮尾本 平家物語」朝日新聞社)

敵の大將は知盛を狙い、馬を寄せてきた。父を守るべく、その間に割って入る知章。大將の体に組みつき、二人ながらに落馬した。

知章は大將の体を抑え、腰刀を抜いてその首を取ったが、立ち上がろうとした瞬間、無残にも別の武者に討たれてしまう。

これを見た監物、躍り上って怒り、知章討った童武者を取っておさえ、その首を搔(か)いてしまった。そのあと、知盛めがけて押寄せて来る敵に片っぱしから矢を射かけたが、矢だね尽きたあとは打物取って奮闘、しかしついに左の膝(ひざ)がしらを射られ、監物坐(すわ)ったまま討ち死にを遂げたのである。

その後、知盛は沖までなんとか逃げのび、無事に船に乗り込んだ。

監物太郎頼賢は家臣としての役目を、果たした。

一の谷の合戦では、数多くの武者が命をかけて戦い、壮絶に散った。

⑨「平盛俊の墓」

神戸市長田区庄山町3-2

<義経神戸源平物語より>

西門の敗戦を受けた北門の大將越中前司平盛俊(もりとし)は、明泉寺(みょうせんじ)から南へ逃げ延びる途中で、源氏の猪俣小平六則綱と一騎打ちとなります。双方むんずと組み付いて戦いましたが、盛俊(もりとし)が優勢となり則綱が降参したためあぜ道で二人が休んでいるところへ、源氏の人見四郎が近づいてきました。近づく敵に気を奪われてた盛俊(もりとし)は、則綱に襲われ首を討たれてしまいました。なお、明泉寺(みょうせんじ)付近にも、盛俊(もりとし)の石碑が公園内に建てられています。



平盛俊(?~1184)は平安時代末期の平家方の武将で、父の平盛国とともに平清盛の側近を務めた人物として知られている。越中守であったが、源氏により官位を剥奪されたため平家物語では越中前司が用いられる。